



ニューヨーク大学はニューヨークの下町ワシントン広場にある。ニューヨークの目抜き通りである五番街はそこから北に延びている。そこにはアメリカの初代大統領ジョージ・ワシントンの大統領就任100周年を記念して建てられた凱旋門がある。公園には池があって噴水もある。ニューヨークの冬は寒い、ある日突然春がやってくる。春になると人々は太陽の光を求めて公園で上半身裸になって日光浴をはじめ。子どもたちは池にはいって水遊びをしてはしゃいでいる。

ワシントン広場のまわりはグリニッチ・ビレッジで、そこに住んでいる絵描きや詩人も公園に出て来て、モジリアーニのような絵を並べて売ったり、詩集を売ったりする。音楽家や大道芸人も出て来てギターや南米の民族楽器を奏でる。ワシントン広場の近くにはアート・シアターがあって、ある時新藤兼人監督の『裸の島』を上映していた。私は懐かしさのあまり劇場に飛び込んだ。白黒映画で見る母国の情景がまるで外国の風景のように見えた。色彩豊かな服装を見なれた私は、まるで異邦人を見るような目で映画の中の日本人を見ていることに気がついた。

ニューヨーク大学にはキャンパスがない。ワシントン広場のまわりのいくつかの赤レンガの建物が校舎になっていて、公園がいわば借景になっている。ワシントン広場のほかにもウォール・ストリートにビジネス・スクールがあり、アップタウンにも医学部がある大規模

な私立大学で、アイビーリーグ（ブラウン、コロンビア、コーネル、ダートマス、ハーバード、ペンシルバニア、プリンストン、イエール）には及ばないが、全米の大学ランキングでは10位台に入っている。授業料が高いことも有名で、1単位を登録するのに50ドルとかいう話も聞いた。私の場合は、授業料はフルブライト委員会が払ってくれて、往復の航空運賃のほかに月220ドルが支給されていた。それでもニューヨークで生活するにはぎりぎりだが、日本の大学でも貧乏生活をしていたので、あまり気にならなかった。

ニューヨークは人口のおよそ三分の一がユダヤ系だともいわれ、ユダヤ教の祝祭日はほとんど休講に近かった。学生は多分教授が休むだろうと思って休み、教授は生徒が来ないだろうと思って休むことが多かった。

後期に入ってから私はワシントン広場から歩いて5分もかからない都市再開発(urban renewal)のアパートにロシア系ユダヤ人とポーランド系ユダヤ人と3人でルーム・シェアして住むことにした。日曜日になるとニュース・スタンドへ行ってニューヨーク・タイムズの一抱えもある日曜版を買った。アメリカの新聞は広告も多いが、日曜版は文化面などが充実していて、演劇、音楽、美術、書評など半日かけて拾い読みしても十分楽しめた。鍵のある生活に慣れていなかった私はよく鍵を部屋の中に忘れた。忘れるたびに玄関に金モールの入った制服をきて立っているイタリア人のコンシアージュにチップを渡して開けてもらった。当時チップはクォーター（25セント）だった。

私は電気炊飯器を船便で送ってあったので、日本人の友達もよくご飯を食べにきた。当時ニューヨークには日本食を食べさせるところは3軒しかなく、アップタウンに「さいとう」、ウオール・ストリートに「歌舞伎」、それに14丁目あたりに日本食料品を売る店を兼ねた食堂があっただけで、「さいとう」や「歌舞伎」はビジネスマンの接待用の店だから、学生には縁がなかった。

私はここを根城によくメトロポリタン美術館やニューヨーク近代美術館、グッゲンハイム美術館などに出かけた。ブルックリン美術館も好きなところだった。近代美術館には当時まだピカソのゲルニカがあった。その後ゲルニカは故郷のスペインに返還された。近代美術館ではテレビの草創期からの番組を週変わりでも上映する催物があって、CBSレポートのマッカーシー旋風を告発した番組やNBCのドキュメンタリーなどを見ることができた。タイムズスクエアの地下には Believe It or Not Museum という怪しげな博物館（見世物小屋）もあって、古代の拷問具や猿のミイラなどが陳列してあった。ニューヨークの地下鉄には鈍行と急行があってアップタウンに行くのにも便利であった。

夜はグリニッチ・ビレッジがよみがえるときである。ビレッジ・ストンパーズの「ワシントン広場の夜はふけて」とか、坂本九ちゃんの「上を向いて歩こう」が Sukiyaki という名前ではやっていた。アパートからは眼と鼻の先には Blue Note とか Village Vanguard というジャズ・スポットやオフ・ブロードウェイの劇場があってさまざまな夜を演出していた。

夜は屋台が出て、ピッツァなどをよく屋台で食べた。海鮮類もあって、チェリー・ストー

ンという小型のハマグリにレモンをしぼって食べさせるのも日本人の口に合った。

私がニューヨークにいた間に起こった最大の出来事はキューバ危機であった。私は来客を案内して国連見学に出かけていた。ケネディー大統領の演説があるというので、みんなテレビの前にあつまった。ABC、CBS、NBCの三大ネットワークが一斉に大統領の演説を生中継する。私は quarantine ということが分からなかったため、何が起きているのかが正確には理解できなかった。しかし、記者の解説や周りの会話からそれが「海上封鎖」であることが分かってきた。第3次世界大戦はすぐそこまで迫っていたのである。核戦争が起こればニューヨークでは広島以上の惨劇が繰り広げられることは誰の眼にも明らかだった。「キューバを攻撃せよ」という世論も強かったに違いない。ケネディーは先制攻撃を避けて粘り強い交渉を選んだ。そして、フルシチョフはそれに応じた。歴史は第二次世界大戦の教訓を学んでいたのであろう。フルシチョフがこの転進を国内でどのように説明したかについては、私は知らない。

そのころ隣のニュージャージー州プリンストンには江藤淳がいたことは、後になって知った。『アメリカと私』を読むと、プリンストン大学での牧歌的な大学生活はニューヨークとは全く違うことが分かる。アメリカらしい大学といえば郊外に広大な緑のキャンパスをもったプリンストン大学やミシガン大学のような大学である。ニューヨーク大学は大学である前にまずニューヨークである。プリンストン大学は歴史の古い大学であり、大学の校舎の窓ガラスが平面でなく、手作りの芸術品のようにゆがんでいたのが印象的だった。

プリンストンには企業の研究所もあり、RCAの研究所を訪ねたこともある。案内してくれたスタッフによると「この研究所には、この分野のノーベル賞受賞者の3分の1がいます。したがってこの分野の新発明の3分の1はこの研究所からでる可能性があります。」ということであった。その自信にはびっくりした。ところが、その後の経過を見ると、アメリカのテレビ受信機は日本製に席卷されて、ついにアメリカではテレビ受信機はアメリカでは作られなくなってしまった。韓国が進出してくるのは、その後の時代になる。そのころになるとアメリカはコンピューター分野で世界をリードすることになる。アメリカは今でもフロンティアを求めている。

小田実は『何でも見てやろう』のなかで「この社会は眼に見えないところに途方もなく金をかけた、底知れぬほど豊かな社会であることが分かってくる」と見抜いている。小田実はアメリカのなみはずれた豊かさに驚愕し、アメリカ人の持つタフさ、底抜けの明るさ、人のよさに感心している。

これに対して、江藤淳はアメリカに圧倒されながらも、アメリカの鏡に日本を映してみている。英米の文学の研究者だった江藤淳は日本には万葉集以来の文学や日本独自の思想がある、という自負があった。そして「許せないことの一つは（アメリカ人のなかには）ナチスのユダヤ人虐殺であり、もうひとつは真珠湾攻撃であると考える人が多い。（しかし）戦

争が道徳的意志の表現であるという神話が通用するはずはなかった。」と開き直ってもいる。そして「ペリー提督来航以来、日本人は、欧米列強の圧力に対して独立を保つために、自分の手で自分のウエイ・オブ・ライフを破壊し続けていた。」として、明治維新以来の日本の近代化を否定しているともとらえられかねない歴史観を示している。さらに、戦後の国体である平和と民主主義という理念は新しいタブーだと受け止め「"Democracy"とは、米国人にとっては他の何であるよりもさきに、彼らのナショナリズムの象徴であった。」として「平和」と「民主主義」にさえ疑問をなげかけている。

小田実はギリシャ古典の研究者だからアメリカに圧倒されながらも、アメリカは自分の世界の外にあるギリシャ文明の末裔として受け止めている。そして、アメリカはその文明の重圧に耐えかねていると考えた。

それに対して江藤淳は日本の古典文学に自信をもっていたから、アメリカに対して異質なものを感じるとともに、日本の鏡に照らしてアメリカを見ている。江藤淳の違和感はアメリカの大きさに対する反動で、誰もが多かれ少なかれ感ずる感情をあけすけに語ったものであった。江藤淳は日本を背負って、背伸びして、肩ひじをはっているように見える。江藤淳には日本には誇るべき歴史がある、万葉集以来の優れた文化もある、日本は必ずアメリカを超えることができるはずだという悲壮感がある。

【予告編】

第5話 海に火輪を

第6話 Back to 1960's

第7話 帰国—日本文化圏再突入

第8話 アメリカ再訪

第9話 アジア回帰

第10話 アメリカ NOW